

腸管虚血性疾患に対する ICG 蛍光法を用いた術中腸管血流評価と意義

1. 研究の対象

2018 年 7 月～2019 年 11 月までの間に腸管虚血性疾患に対する外科手術を受けた方

2. 研究目的・方法

絞扼性腸閉塞や非閉塞性腸間膜虚血などの腸管虚血性疾患においては、腸管大量切除が必要となることがあります。但し、腸管大量切除を実施した場合、救命できても短腸症候群となり、術後に低栄養から患者さんの QOL 低下を来すこととなります。また、腸管切除後に再度腸管壊死に対する再手術が必要となる場合もあり、術中に腸管壊死・虚血の診断能向上は重要です。

近年、腸管血流評価において、ICG 蛍光法という光で血流を判断する方法の有用性が報告されています。ICG 蛍光観察を行うことにより、肉眼所見に比べ腸管の血流障害の有無がより客観的に評価可能で、肉眼所見と合わせることで診断の感度が向上する可能性があります。

この研究では当院の手術記録はじめ診療の範囲で取得した情報をもとに、手術時の ICG 蛍光法の有用性の評価、および病理診断との対比を行い、虚血、壊死を示唆する ICG 蛍光所見を明らかにすることを目的としています。

3. 研究に用いる情報の種類

手術中の録画映像、縫合不全の有無、再腸管切除の有無、在院日数、転帰、病理診断結果など

4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。

ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としませんので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先

済生会熊本病院 研究責任者：外科 部長 高森 啓史

熊本市南区近見 5-3-1

TEL：096-351-8000（病院代表）